

害虫や病菌が張り切って活躍するシーズンになってきましたので、家庭菜園にポイントをおいて野菜、花、植木などの主な病害虫について順次まとめて行きたいと思います。

家庭菜園の入門に当たるナスの栽培は灌水と茎の誘引と害虫によって支えられています？

ならやまのナスクラブのメンバーの頭を最も悩ませているのがテントウムシダマシ（本名：ニジュウヤホシテントウ）でしょう。しかし去年はほとんど被害をださず上手に栽培されておられ、驚きでした。

この虫はナス科の植物しか食べません。典型的な偏食家です。主としてナス、ジャガイモ、ホオズキ、ダチュラ（エンゼルトランペット）、野草のイヌホオズキですが、ときどき血迷ってキュウリの葉をかじります。

食事マナーが独特で、体をずらすようにして葉の片面を浅く齧り取ります。そのため、被害を受けた部分には石段状の傷が残ります。その部分の組織が死ぬことにより褐色になります。また果実も大好きで、表面を齧るだけで果皮が裂けてパンクしますので被害甚大です。

成虫はテントウムシそのもので、黒くて丸い模様を散らした赤褐色の衣装をつけています。手で触ると嫌な匂いのする黄色の汁を出し、それに驚いている間にスタコラサッサと逃げてゆきます。幼虫は黄白色の柔らかい虫ですが、体全体が黒い棘で包まれていますので、触ると危ないという感じを持たせますが、触ってもまったく痛くも痒くもありません。見つけ次第ひねりつぶしましょう。



4月になると、

石垣の隙間などで冬越しをした成虫が腹を減らして食べ物を探しまわります。その一番の御食事処

はジャガイモ畑です。美味しそうな葉をみると涎をたらして集まってきて宴会を始めます。このときに捕まえてしまえばナスへの引越しがかなり回避されます。

つぎに厄介な虫は夏に発生するチャノホコリダニです。名前の通り、埃のような小さなダニで肉眼では見つけることはできません。この虫は新芽の隙間や新葉の裏にとりつき、貴重な栄養分を吸い取ります。多発すると1枚の葉に数百匹の虫がつき、食事、嫁さん探しと走り回っています。

被害を受けた新芽は堅くなって新しい葉が伸



びだしません。新葉も堅くなって変形し、裂けて小さな孔もあきます。葉の裏は茶色に変色し、ピカピカと光沢も生じます。勢いよく成長していた株がなんとなく成長がにぶくなり、最後には成長が完全にとまります。早めの薬剤散布が基本で、他に有効な対策はありません。

春～夏に葉の裏に小さな虫が行列を作っておればアブラムシさん一家です。見つけ次第指でおしつぶしましょう。アブラムシ算で一気に増えますので1週間もすると葉は虫で占領されますので、残業をしてもその日に退治しましょう。

5～6月にはヨトウムシの子供さんが葉にポツポツ孔をあけて食い荒らしますので、被害に気づいたら葉の裏を調べて青虫を捕まえます。

病気で恐ろしいのは土壌中に潜んで株全体を枯らす土壌病害です。発生してからの対応策はありませんので、栽培場所を毎年変えるのがもっとも優れた予防対策です。